

音源の比較試聴(40)
—ラフマニノフのピアノ協奏曲 2 番—

1. 始めに

前報(39)に引き続き、各種音源の再生経路に関する仮想アースとアースアキュライザーや OPT ISO BOX や LAN iPurifier Pro などを含む種々の対策の効果の確認のため、各種音源の比較試聴を実施します。

2. 音源の比較試聴の試聴方法と音源

アナログ関係の対策の経過は前報(27)でも延べたとおりで、配信や CD 再生の光アイソレーションなどの対策は fidata HFAS1-S10 の活用シリーズや OPT ISO BOX の導入シリーズや LAN iPurifier Pro で報告してきました。

今回、同じマスター音源のアナログ盤と STAGE+からの配信を比較試聴します。

アナログ盤は下記を使用します。

ドイツ・グラモフォン MG2197

セルゲイ・ラフマニノフ ピアノ協奏曲第 2 番ハ短調

スヴィヤトスラフ・リヒテル (ピアノ)

スタニスラフ・ヴィスロスキ指揮ワルシャワ国立フィルハーモニー

LONDON SLA1033

セルゲイ・ラフマニノフ ピアノ協奏曲第 2 番ハ短調

ウラディーミル・アシュケナージ (ピアノ)

アンドレ・プレヴィン指揮ロンドン交響楽団

配信は STAGE+から上記と同一の曲を選択します。

セルゲイ・ラフマニノフ ピアノ協奏曲第 2 番ハ短調

ブルース・リウ (ピアノ)

ジャンンドレア・ノセダ指揮サンタ・チェチーリア国立アカデミー管弦楽団

セルゲイ・ラフマニノフ ピアノ協奏曲第 2 番ハ短調

アレクシス・ワイゼンベルグ (ピアノ)

ヘルベルト・フォン・カラヤン指揮ベルリンフィル

セルゲイ・ラフマニノフ ピアノ協奏曲第 2 番ハ短調

スヴィヤトスラフ・リヒテル (ピアノ)

スタニスラフ・ヴィスロスキ指揮ワルシャワ国立フィルハーモニー

それぞれの音源は、下記の経路で聴いていきます。

アナログ盤

LINN LP-12→ZANDEN Model 12→Brooklyn DAC+→TruPhase
STAGE+

ルーター→スイッチングハブ→PC→Brooklyn DAC+→TruPhase

3. 音源の比較試聴結果

アナログ盤は、レーベルに対応したイコライザー特性で聴いていきます。

アナログのリヒテル／ヴィスロスキ指揮ワルシャワ国立フィルハーモニー盤は、腰の据わった重量感ある演奏です。

アシュケナージ／プレヴィン指揮ロンドン交響楽団盤は、先鋭的ですがっきりとした切れの良い演奏で、上記のリヒテルとずいぶん違った印象です。

STAGE+のブルース・リウ／ノセダ指揮サンタ・チェチーリア国立アカデミー管弦楽団の演奏は、STAGE+を楽しむ(345)で報告しているとおり、メランコリックなロマンチズムの表情ブルース・リウが、じっくりとがっちりとした構成で構築しています。

STAGE+のワイゼンベルグ／カラヤン指揮ベルリンフィルの演奏は、壮大でかっちりとした構成でありながら、耽美的なところもある演奏です。

STAGE+のリヒテル／ヴィスロスキ指揮ワルシャワ国立フィルハーモニーの演奏は、上記のアナログ盤とマスターが同じのようで、演奏内容は上記のアナログ盤と同様ですが、音質的には若干重量感が薄れます。

4. まとめ

アナログ再生と STAGE+からの配信を比較してみましたが、これまでの対策で、すべてにおいてレベルが向上しており、以前のような格差がなくなっており、音源毎の演奏スタイルの違いがはっきり把握できます。

以上